

エコ近畿

美しい水環境の整備・環境対策の推進

近畿には、海、山、川など豊かな自然があります。世論の高まる環境への意識を踏まえつつ、それら近畿の特徴である身近な自然を、保全・再生し、豊かな都市環境を形成する必要があります。

環境基準への達成を目指して

1 大和川の水質の現状

かつては泳いだり、アユが見られるほど美しい川だった大和川ですが、流域における都市化の進展の結果、水質が悪化し、昭和45年にはBOD(75%値)が31.6mg/Lとなるなど、水質の汚濁の進行が顕著でした。

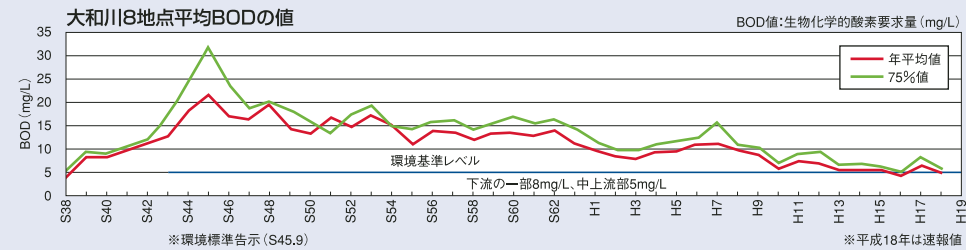
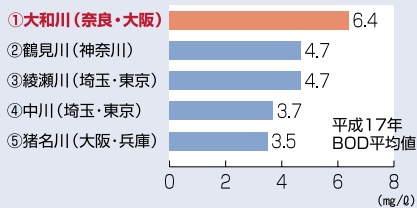
このため、水質改善に取り組み、平成14年度には「大和川清流ルネッサンスⅡ(第二期水環境改善緊急行動計画)」を策定し、流域の関係機関・住民の方々とともに水質改善の取り組みを行なってきました。

この結果、近年の水質は環境基準レベルを下回るほど改善されてきましたが、依然として環境基準に達していない地点があります。

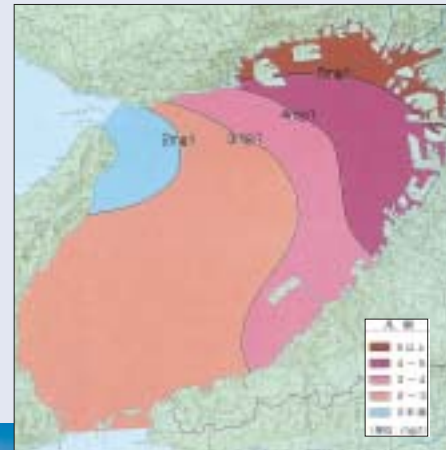


柏原堰下流(柏原市)昭和36年頃/八尾市提供

全国の一級河川のワースト5



大阪湾の現状の水質(夏季COD)



汚濁物質が蓄積しやすい

2 自然浄化能力が低下している大阪湾の水環境

大阪湾では、古くから干潟や浅場を埋め立てて都市機能を拡張してきました。これに伴ない干潟・藻場などの自然海岸や浅海域が喪失し、沿岸域における水生生物の生息空間が減って海の自然浄化能力が低下し、水質汚濁が慢性化しています。また、沿岸の93%が直立護岸(垂直護岸、消波ブロック護岸)で、港湾緑地や臨海部に住民が憩えるオープンスペースが少なく、海と人との関わりが希薄になっています。

江戸時代からの埋め立てで干潟・浅場をなくす



流域と水と人との関わりが分断された琵琶湖・淀川流域

3 流域と暮らし・人との本来のかかわりを取りもどす

琵琶湖や淀川流域は、古くから豊かな自然の恵みによって潤され、舟運を生かした物流網などにより政治・経済・文化の中心地として発展してきました。しかし都市化の進展とともに流域資源に依存しない産業形態や生活様式に変化し、自然や水と人との関係が希薄になっています。さらに、開発による農用地や山林の減少、人口や産業の集中が環境負荷を増大させ、琵琶湖における内湖やヨシ帯、河川における瀬と淵、ワンドなどが減少し、そこを生息・生育場所としていた固有種や希少種が絶滅の危機に瀕しています。



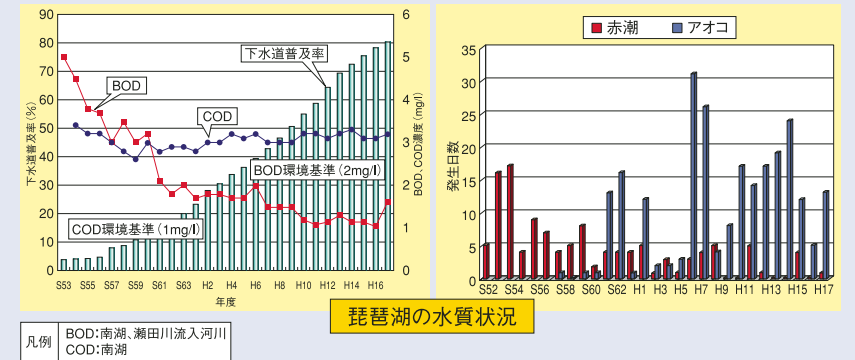
高度に市街地化した淀川下流部



琵琶湖での水生生物調査



琵琶湖



自然と共生する川づくりの推進

4 コウノトリも共生する河川環境の再生(円山川)

国内最後の生息地となった兵庫県豊岡市にある「兵庫県立コウノトリの郷公園」では、国の特別天然記念物のコウノトリの人工飼育が行われ、野生復帰を目指してきました。

また、平成15年3月には、「コウノトリ野生復帰推進計画」が策定され、平成17年9月より試験放鳥が始まっています。

豊岡市を流れる円山川においても連携を図ってきており、「円山川水系自然再生計画」(平成17年11月)を策定しています。



円山川に舞い降りたコウノトリ

コウノトリ保護・増殖の歴史

